



「地域の祭りとおかさ」

地域に入るときに必ず行う事前調査や調整で心がけることのひとつが「祭り」に対する聞き取りです。どんな祭りがいつどこで行われるか？そこで何をやるのか？

この情報の濃度が濃いほどその地域は様々な面で「豊か」といえる気がします。

祭りという言葉の意味は古くはいわゆる 神仏・祖先をまつことや儀式を指しました。特定の日に身を清め、供物をささげて祈願・感謝・慰霊などを行うという意味から、最近ではイベント的なものまでを含む幅の広い言葉ですが、古くから行われる地域の祭りは季節ごとの節目（いわゆる節句など）に行われることが多いように思われます。

各家庭、個人や集団により行われる祭事も多ですし、農業などの暮らしの営みと結びつく「行事」に近いニュアンスのものもありますね。

私はこの祭りは自然との付き合いが欠かせない、つまり人と季節＝自然の接点をあらわしているのではないかと考えています。

明治時代に新暦と旧暦の切り替えが行われたため、本来の季節とのずれを感じさせるものも多いですが、それでも未だに祭りが季節を感じさせる行事であることは、1年目に行った問い掛けからも明らかです。

また、祭りが伝統的であればあるほど、装飾・食事には地域の自然から得られた動植物が活用されています。

基本的にはその土地で本来とれないもの（山間部であれば海産物などの供物など）以外は地域自給していました。例えば高知ではお祭り（ハレの日）に多様なもちやだんごを作ります。それは地域特有のものも多く、また家庭ごとにも違います。当然ですが、季節ごとにも違いがあります。他県ではすでに失われた食材や製法もあります。

が、これらの素材がすでに地域自給できない、自給割合が極端に減るという事はもはやその地域の自然資本の劣化の危機ではないでしょうか？

残念ながら各地の祭りでの「伝統的な食の素材自給率」をきちんと調べ、統計を取ることはできませんでした。

が、聞き取りを行った限りでは、もはや地元産は一部の山菜と多くはない種類の農作物に限られている様子でした。そしてもっと悲しいことはその素材が「地域産」かどうかにかかわらずに心を配る人が少なくなりつつある様子です。

祭りが地域の豊かさのモノサシと考えた場合、遠い国から運ばれてきた産物で祝い、あるいは祀られることはやはり何かしらの悲しさを感じません